

「肝臓の外科」

Liver Surgery

With operative color illustrations

Roy Y. Calne 編

東北大学教授 葛西森夫 監訳

筑波大学教授

岩崎洋治

これほどまでに手術の要点を簡潔にまとめた本は、これまでお目にかかったことがない。カラー写真を中心とした、200枚以上の色彩鮮やかな図によって、肝臓の手術が順序よく解説されている。頁をめくると、手術は進行し、短い文章で手術のコツと、患者の生命を守るために絶対に必要な処置内容が記載されている。

執筆者はそれぞれ世界の第一人者であり、それらの人々が経験に基づいて肝臓手術の真髄を披露しているのが本書の特徴であろう。このような発想は日本人にはあまり馴染まないように思える。

編者はケンブリッジ大学で肝移植を中心とした臓器移植に執念を燃やしている Roy. Y. Calne 教授である。したがって肝移植の適応、肝保存、手技が Calne 教授を含めた3人

の著者によって紹介されているが、面倒な条件が複雑にからみ合う肝移植でさえ、その解説は極めて簡明であり、しかも要点は逃がしていない。

わが国からは先天性胆道閉塞症の手術方法を開発された葛西森夫教授が、その手術を25葉のカラー写真で紹介している。

肝臓外科に経験のあるものにとって、本書は努力して読む本ではない。読み始めたら途中ではやめられない内容を持っている。これから肝臓外科に着手しようとする外科医にとっては、あまりにも内容が簡明すぎて驚かれるかもしれない。しかし手術のコツは、理にかなった方法を、基本に忠実に行うことであり、そのような目で読まれるならば、手術の奥義を汲み取ることができるであろう。

肝外傷から始まるが、まず手術に

必要な肝の解剖がカラー写真で示され、病態に応じた各種の治療法が述べられている。第2, 3, 4, 5章では、肝右葉切除、肝中葉切除、左外側区域切除、肝実質門脈管結紮法による肝左葉切除が、Ong氏(香港)、Lin教授(台湾)、Dawson氏(英国)およびTung氏(ベトナム)によって記載され、次いで肝包虫、先天性胆道閉塞症、肝外胆管良性狭窄、肝内結石および肝門部胆管癌に対する手術術式、肝腫瘍の姑息的治療法が盛り込まれている。更に肝移植の手技に引き続いて、30を超す肝腫瘍およびその類似疾患の特徴がわかりやすく付記されている。

1～2の疾患の治療法に関して、多少意見の違いはあっても、本書に記載されたすべての治療法は、過去数十年間、その分野の第一人者によって最良の方法として行われ、また現在でも広く実施されている術式である。その意味で、本書は世界における肝臓外科の進歩の成果を1冊の本に凝集させ、無駄な解説を徹底的に排除することによって、手術の奥義を浮き彫りにした名著と言える。

日本語訳は、葛西森夫教授ゆかりの方々が分担されている。

A4変型 298頁 1986年 17,000円
(〒400)

医学書院 刊